

平成26年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT26019

ことば・心・コミュニケーション



開催日：平成26年8月8日(金)

実施機関：東北大学
(実施場所) (情報科学研究科および青葉山体育館)

実施代表者：邑本 俊亮
(所属・職名) (災害科学国際研究所・教授)

受講生：小学5・6年生 40名

関連URL：

【実施内容】

定員30名のところ44名の応募があり、全員に受入通知を出しました。キャンセル・欠席者が4名出たため、当日の受講者(小学校5・6年生)は40名となりました。また、家族の同伴見学者は37名で、総勢77名の参加者での開催となりました。

1. 開講式(10:00～10:25)

実施代表者によるあいさつ・自己紹介の後、科研費と本事業との関係の説明、スケジュールの確認が行われました。

2. 講義①:言葉の不思議(10:30～11:00)

まず、絵を言葉で伝える実験が行われました。講師(邑本)がイメージした絵を、言葉による説明だけで参加者に伝え、参加者がそれを手元の用紙に描きました。講師がイメージした絵と参加者が描いた絵が大きく食い違うことが明らかとなり、言葉だけで相手に伝えることの難しさを体感しました。続いて、講師が、私たちが使っている言葉がいかに「あいまい」で「不十分」で「気まぐれ」であるかについて、具体的な例を挙げながら説明しました。そして、そのような言葉の性質があるからこそ、私たちはときどき相手の言葉を誤解してしまうことを、多くの誤解例とともに解説しました。講師が提示したさまざまな具体例は受講者の興味をひくものであり、会場からは始終笑いが起こったり、納得の声があがったりしていました。

3. 講義②:言葉を理解する心(11:10～11:50)

「あいまい」で「不十分」で「気まぐれ」な言葉を使いながらも他者とコミュニケーションがとれるのは、私たちが相手の言葉を受け止めて理解するとき、自分の心を働かせているからであることが講義されました。具体的には、文脈情報を利用したり、自分の知識を活性化したり、言葉が使用されている場面を見たり、言葉以外のメッセージを頼りにしたり、相手のことを考えて理解したりしているからであることが、さまざまな具体例とともに解説されました。そして、言葉を理解するのは言葉を受け取る人の心であり、受け手の心で意味が生まれること、送り手が意味を決めているわけではないことが述べられ、相手がどう理解するかを考えながら言葉を使うことの大切さが強調されました。



4. ランチタイム(12:00~13:00)

くじ引きによって男女別の3~4人の小グループになり、各グループに大学生がひとりずつ入って、キャンパス内の学食に移動し、昼食をとりました。参加者のほとんどが大学の学食は初体験で、少々戸惑いながらも、自分の好きなおかずを自分で選んで取ったり注文したりする姿がありました。大学生のお兄さんお姉さんと会話をしながら、子どもたちは楽しそうにランチタイムを過ごしました。

5. コミュニケーション・ワークショップ(13:15~16:00)

突然の雷雨で体育館への移動が遅れ、15分遅れの開始となりました。受講生のほか、スタッフや同伴者も参加して、大人数のワークショップとなりました。まず、ウォーミングアップゲームで身体と気持ちをほぐしました。その後、受け手の態度によって話している時の気持ちがどのように変わるのか、実験を行いました。受け手の態度として、①無表情、②話し手の言葉をオウム返りする、③話し手の言葉を否定する、の3パターンを行い、それぞれの場合で話し手としてどんな気持ちになったか意見交換を行いました。また、限られた会話時間の中で2人の共通点を出来るだけ多く見つける試みもしました。休憩をはさんで記念写真を撮影し、その後、言葉を使わない状況で「伝える力」と「受け入れる力」を体感する実験を行いました。具体的には、二者択一の問題で声を出さずに2つの回答のグループに分かれる実習や、30人ほどのグループで輪になって、①拍手を隣に伝えてなるべく早く一周する、②手を握って隣に伝えてなるべく早く一周する、③言葉を使わずに同時にジャンプする実習などを行いました。



6. まとめ:コミュニケーションについて考えよう(16:10~16:40)

まとめとして、一日のことを振り返り、コミュニケーションについて考えてみる時間をとりました。午前中の講義からは「言葉を理解するために心を働かせること」「世の中や相手のことをよく知ること」の大切さがわかったこと、午後のワークショップからは「コミュニケーションは言葉だけではないこと」がわかったことを、みんなで確認しました。さらに、それに加えて「相手を認めること」の大切さについて、講師が心理学的知見を交えながら解説しました。最後に、講師より受講者に「言葉は相手との信頼関係や絆があってこそ輝く、人との絆を大切にしてほしい」という旨のメッセージが送られました。



7. 修了式(16:40~17:00)

参加者はアンケートの記入を行いました。また、受講生ひとりひとりに未来博士号が授与されました。

■プログラムを工夫した点

- ①参加者の氏名がわかるように、名札と机の上に置くネームプレートを用意しました。講義・実習中は、質問や指名をする際に参加者の名前を呼ぶように心がけました。
- ②配付資料は、専門用語は使わず、語りかけるような表現で作成しました。また、漢字の習得学年を調べ、5年生が未習得である漢字にはルビをふりました。
- ③講義で使用するパワーポイントのスライドについても、漢字の習得学年を調べ、5年生児童が読める漢字の使用を原則とし、そうでない漢字にはルビをふるなどの工夫をしました。
- ④講義では、興味をひく例や身近な例を多く示して、驚き・楽しさ・わかりやすさを心がけました。また、実際に作業したり、考えたりする時間を設け、受講者が能動的にかかわれるようにしました。さらに、講義担当者が参加者の中を回りながら、問いかけたり質問したりしました。受講者がノートをとるための時間を、受講者の様子を見ながら、十分に確保しました。
- ⑤ランチタイムでは、大学生にグループリーダー役を務めてもらい、初対面の子ども同士が楽しく会話できる場を設けました。
- ⑥ワークショップでは、体を動かして楽しみながらコミュニケーションについて学べることをめざし、ワークショップ指導の専門家を外部講師として招いて、実習を行いました。
- ⑦一日通してのプログラム構成を考え、実施者から参加者へメッセージが伝わるように工夫しました。

■事務局との協力体制

- ①研究推進課基盤研究係が振興会への連絡調整と、提出書類の確認・修正等を行いました。
- ②広報課広報係が大学 web ページにより本事業について PR を行いました。
- ③災害科学国際研究所専門職員が委託費の管理と支出報告書の確認を行いました。
- ④情報科学研究科総務係が、電話、FAX、メールによる申し込みを受け付けました。

■広報活動

広報課広報係が大学の web ページに情報を掲載し、PR を行いました。その他、実施代表者は以下の広報活動を行いました。

- ①仙台市教育委員会と宮城県教育委員会に後援名義を申請し、許可をいただきました。
- ②仙台市子ども会育成会連合会主催のインリーダー研修会で、チラシを配布させていただきました。
- ③仙台市内の市民センター・公共施設、東北大学内の施設など計 11 か所に出向き、チラシの設置をお願いしました。
- ④仙台市内の小学校 15 校に直接出向き、児童へチラシの配布をお願いしました(当初 30 校ほど訪問する予定でしたが、小学校訪問開始後から申し込みが殺到したため、15 校で広報活動を打ち切りました)。
- ⑤上記の広報活動で十分な効果があったため、イベント情報サイトへの情報提供や地方新聞への募集案内掲載などは取りやめました。

■安全配慮

参加者全員分の傷害保険に加入しました。熱中症対策として、体育館に大型の扇風機を複数台設置し、さらにジュース等の飲み物を用意しました。プログラム実施中は受講者 4 人に対して 1 人の割合で実施協力者(学生アルバイト)を配置し、参加者の安全を見守りました。講義室、学食、体育館の間の移動の際にも、実施協力者が参加者を引率しました。また、万が一のときに備え、近隣の病院リストを作成しておきました。

■今後の発展性、課題

参加者の様子からもアンケート結果からも、参加者の満足度が高いことがうかがえます。プログラムの内容としては、十分に成熟していると考えています。最大の課題は、プログラムを安全に、スムーズに、トラブルなく遂行できる環境(駐車場、講義室、学食、体育館)の選定と、実施協力者(学生アルバイト)の確保です。

【実施分担者】

【実施協力者】

【事務担当者】

内藤 美緒

14 名

研究推進部研究推進課基盤研究係・基盤研究係長